

大学共同利用機関法人

情報・システム 研究機構

Inter-University Research Institute Corporation
Research Organization of Information and Systems

国立極地研究所

National Institute of
Polar Research

国立情報学研究所

National Institute of
Informatics

統計数理研究所

The Institute of
Statistical Mathematics

国立遺伝学研究所

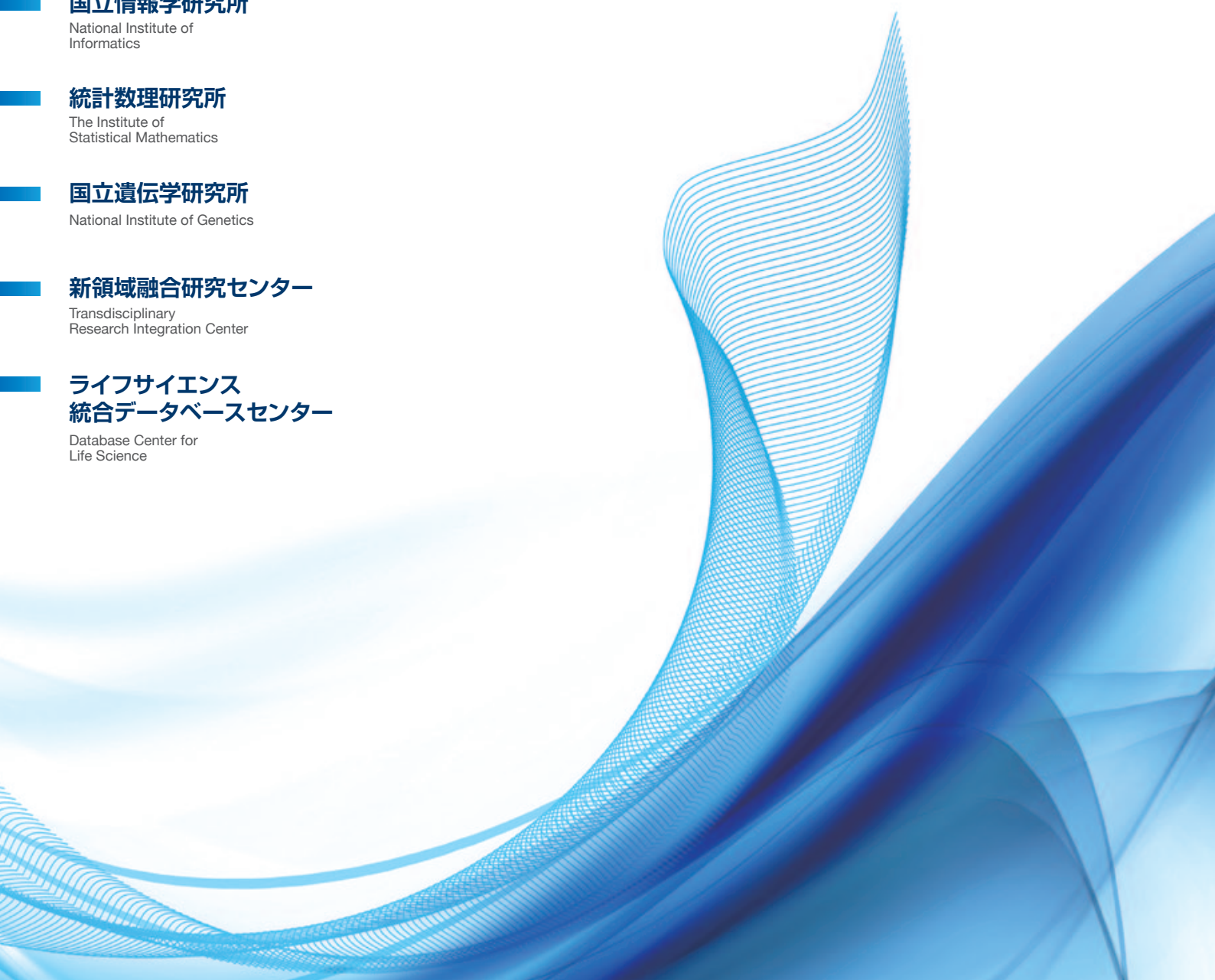
National Institute of Genetics

新領域融合研究センター

Transdisciplinary
Research Integration Center

ライフサイエンス 統合データベースセンター

Database Center for
Life Science



新時代の Establishment & Development 学術研究へ向けて

キーワードは「科学的方法論の確立」と「研究領域の開拓」

私たちの住む現代社会は、情報通信技術の飛躍的發展を背景に、かつてない大きな変革の時期を迎えています。20世紀後半の情報技術の進展は情報の価値を物質・エネルギーと同等のものに高め、情報社会が確立しました。しかし現在ではさらに一歩進んで、科学・技術の研究の場に限らず、社会のあらゆる場面において、時々刻々大量の情報がほとんど自動的に取得されるようになっていきます。この結果、ユビキタス社会の到来が現実のものとなり、社会体制も科学・技術の在り方も大きく変化して、量が質に転化するという使い古された言葉が現前した感があります。とくに、科学・技術の世界においては、従来の理論・実験に加え、計算が第三の科学的方法論として確立し、今後は第4の科学ともいわれるデータ中心科学の確立が必要になっています。

情報・システム研究機構は、大学共同利用機関の法人化に

伴って、現代社会が直面する複雑な対象を情報とシステムの観点から捉えようとする理念のもとに、国立極地研究所、国立情報学研究所、統計数理研究所、国立遺伝学研究所が結集して構成されたものです。機構の研究所は、それぞれの研究者コミュニティを背景に特色を活かして独自の立場から先端的な研究を推進し、新しい科学的方法論の確立と新しい研究領域の開拓によって機構の理念の実現を目指しています。また、大学共同利用機関として、それぞれの学問領域の特性を考慮しつつ共同利用・共同研究の機能を強化してまいります。さらに、大学共同利用機関の第3の使命である大学院教育に関しては、総合研究大学院大学の基盤機関として、新しい時代の学術研究の担い手を育成します。

新時代の学術研究へ向けての情報・システム研究機構の挑戦に、皆様のご支援ご鞭撻をお願い申し上げます。



大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構
 機構長 北川 源四郎

機構の理念

情報・システム研究機構は、全国の大学等の研究者コミュニティと連携して、極域科学、情報学、統計数理、遺伝学についての国際水準の総合研究を推進する中核的研究機関を設置運営するとともに、21世紀の重要な課題である生命、地球、自然環境、人間社会など複雑な現象に関する問題を情報とシステムという視点から捉え直すことによって、分野の枠を越えて融合的な研究を行うことを目指しています。この目的を達成するために、中央に融合的な研究を推進するためのセンターを設置し、情報とシステムの観点から新たな研究パラダイムの構築と新分野の開拓を行います。また、学術研究に関わる国内外の大学等の研究機関に対して、研究の機動的効果的展開を支援するための情報基盤を提供することにより、わが国の研究レベルの高度化に貢献していきます。



CONTENTS

機構長あいさつ／機構の理念 2

【機構概要】

大学共同利用機関とは／沿革 4

【研究所紹介】

国立極地研究所 6

国立情報学研究所 8

統計数理研究所 10

国立遺伝学研究所 12

【機構所属センター】

新領域融合研究センター 14

ライフサイエンス

統合データベースセンター 16

【教 育】

総合研究大学院大学との連携 18

【広報活動・情報発信】

広報活動・情報発信 20

【組 織】

組織図 22

総合企画室／知的財産本部 23

データ 24

役員、経営協議会委員、
 教育研究評議会評議員、職員

決算、外部資金、 25

共同研究(公募型)機関数

および共同研究員数、

特別共同利用研究員受入状況

各機関所在地 26

What is Inter-University Research Institute Corporation?

大学共同利用機関とは

南極観測、学術情報ネットワークの運用、データベースの構築および統合化、生物資源やゲノム情報の提供、ネットワーク型共同研究——これらはみな、「大学共同利用機関」ならではの特色を生かした本機構の活動です。一見ばらばらにも見える活動のキーワードである「大学共同利用機関」とは、どのようなものでしょうか？

大学共同利用機関は、各研究分野における「全大学の共同利用の研究所」として、個別の大学では整備・維持が困難な最先端の大型装置や大量の学術データ、貴重な資料や分析法等を全国の研究者に無償で提供し、個々の大学の枠を越えた共同研究を推進するわが国独自の研究機関です。

昭和46年の創設以来、当該学問分野の飛躍的な発展をはかるうえで必要との研究者コミュニティの強い要望等を受け、国立大学の附置研究所の改組等により、現在までに17の機関が設置されています。各機関の運営には研究者コミュニティのメンバーも参画し、それぞれの学問分野の中核拠点として、全国の研究者の英知を結集した共同研究を実施するとともに、研究者コミュニティの実質的な取りまとめ役や、国際的活

動におけるわが国を代表する機関としての役割を果たしています。

平成16年には、大学共同利用機関は、国立大学法人法に基づき4つの独立した大学共同利用機関法人の下に再編され、自立的な環境の下で運営を活性化するとともに、共同利用・共同研究機能の向上や新たな学問領域の創成に向けた戦略的な取組みを推進することになりました。

このような設立の経緯から、大学共同利用機関は研究者コミュニティ、特に大学との緊密な連携のもとに運営されています。「情報とシステム」をキーワードにユニークな視点とバラエティに富んだ研究分野をカバーする本機構においては、700を超える大学や研究機関をネットワークで結び、加えて、大規模データベースを構築して研究者コミュニティに提供することにより、大量データを活用する共同研究を可能にし、学術研究の発展に貢献してきました。今後とも、大学共同利用機関の一員として、大学を中心とする学術研究を支えつつ、研究者の自由な発想を源泉として真理の研究や知識創成を目指す、大学と等質の学術研究機関として活動してまいります。

学会・研究者コミュニティ

全国の大学

研究施設
研究科
附置研究所
学部

● 共同利用
● 共同研究
● 大学院教育
● 高度な研究者の育成

大学共同利用機関法人

人間文化研究機構
自然科学研究機構
高エネルギー加速器研究機構
情報・システム研究機構

民間研究機関
企業研究所等
海外の大学・研究機関
研究開発独立行政法人等

共同研究等

【大学共同利用機関の機能】

1 先端的研究

研究者の自由な発想をもとに機関独自の最先端研究を進めています。

3 大学院教育

最先端の研究環境を活用して、大学院生を受け入れ、また総研大の基盤機関として次世代を担う人材育成に協力します。

2 共同利用・共同研究

研究者コミュニティの声を反映させながら、それぞれの学問領域の中核拠点として、全国の研究者に研究の場を提供します。



【情報・システム研究機構】沿革

国立極地研究所

国立情報学研究所

統計数理研究所

国立遺伝学研究所

平成元年(1989年)

国立学校設置法の一部が改正され、
国立大学共同利用機関を、大学共同利用機関に改称

昭和48年(1973年)
国立大学共同利用機関として設置

昭和61年(1986年)
国立大学共同利用機関
学術情報センター設置

平成12年(2000年)
国立情報学研究所設置
(学術情報センターの廃止・転換)

昭和19年(1944年)
文部省直轄研究所として設置

昭和60年(1985年)
国立大学共同利用機関に改組

昭和24年(1949年)
文部省所轄研究所として設置

昭和59年(1984年)
国立大学共同利用機関に改組

平成16年(2004年)

4つの大学共同利用機関を構成機関とする
大学共同利用機関法人情報・システム研究機構設置

大学共同利用機関法人
情報・システム研究機構
Research Organization of Information and Systems

平成17年(2005年)
新領域融合研究
センター設置

平成19年(2007年)
ライフサイエンス
統合データ
ベースセンター設置

平成21年(2009年)
国立極地研究所と
統計数理研究所が
東京都立川市に移転

平成23年(2011年)



立川キャンパス





National Institute of Polar Research

国立極地研究所

南極・北極から地球システムを探求します

国立極地研究所は、極地に関する科学の総合研究および極地観測を行うことを目的に1973年に設置された大学共同利用機関です。南極、北極におけるフィールド観測を基盤に、資・試料の分析、データの解析、モデリングを通じ地球科学、環境科学、太陽系地球科学、宇宙・惑星科学、生物科学などを包含した先進的総合地球システム科学を共同研究として推進しています。

一方、文部科学省におかれた南極地域観測統合推進本部が推進する南極地域観測事業について、学術研究観測、設営等の役割を担うとともに、北極域においては、観測施設の運営、野外調査支援、情報発信および国際対応などの面で、共同利用の役割を果たしています。



昭和基地

極域科学は地球システムの科学

南極、北極を中心とした極域の自然は、宇宙空間から、磁気圏、電離圏、大気圏、雪氷圏、海洋圏、地圏、生物圏を通して相互につながりを持ち、密接に関連し、それ自体が一つの大きな自然系を構成しています。極域科学は、こうした自然系に関わる幅広い研究分野の基礎に立ち、物理的、化学的、生物的諸過程とその相互作用を地球システムの一環として究明することを目的としています。

極地から見た地球規模環境変化

巨大な南極氷床や北極域の氷河、海氷など雪氷圏は地球の冷源域として大気大循環に影響を与え、また地球規模海洋循環を左右するなど、地球の気候を支配する重要な要因です。このため、地球環境の変動に対して、フィードバック作用などを通じて極域の環境変化が増幅して現れること、人為的影響が少なく地球のバックグラウンド状態を知ることができること、極限環境下の生態系のふるまいを通して生命と環境に関する新しい視点を開拓できること、さらに、雪氷圏の中に過去の地球の気候・環境が記録されていることから、極域で観測することは地球規模の環境変動を知るのに最適です。

極域は宇宙の窓

夜空を彩るオーロラは太陽風と地球磁気圏との相互作用の産物であり、その振る舞いは磁気圏・電離圏のプラズマ物理過程や太陽風エネルギー流入過程を知る貴重な手がかりになっています。

さらに南極域は、惑星物質である隕石や宇宙塵を効率よく採集できること、また宇宙線やミリ波電波が地球大気の阻害を受けにくく観測できることから、宇宙や惑星を観測する窓として、宇宙・惑星研究の重要拠点となっています。

極地から探る地球史

南極大陸の一部には、約38億年前の地球上で最古に属する岩石が分布しています。5億年前の Gondwana 大陸形成にいたる変遷とその後の分裂過程、4千万年前にさかのぼる南極氷床の形成につながる現在の南極プレートの性質を探る上で絶好のフィールドです。形成された氷床のその後の変動は、それにとまなう海水準変動、地殻変動として現在の地球変動に影響をおよぼしています。

「南極から探る地球史」の視点は、地球内部や地球表面の諸現象を46億年という長い時間スケールにわたって解明することにあります。



南極海の棚氷



ドームふじアイスコア掘削



昭和基地オーロラ観測



セールロンダーネ地学調査

National Institute of Informatics
NII 国立情報学研究所

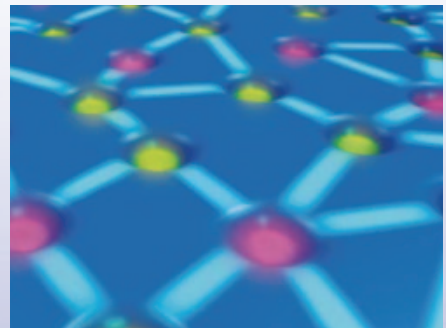
「情報学」の中核的研究機関としてICT社会の根幹を支えています

国立情報学研究所(NII)は、わが国唯一の「情報学」の中核的研究機関として、今や私たちの生活に欠かせない「情報」に関する最先端の研究を、社会や学術の要請に基づいて実施しています。また、大学等の研究・教育を支える学術情報ネットワークの構築や、論文データベース等の学術コンテンツサービスの提供など、「情報学」のみならず、すべての学問分野の学術・研究活動を支えるための、学術情報基盤を構築し提供しています。それらの実現のために、国内外の大学・研究機関や民間企業など、幅広い分野や機関との強い連携により、「情報学」の共同研究拠点としての役割を果たし、広く社会・国際貢献に寄与しています。



量子情報処理

スーパーコンピュータの計算能力をも遥かに凌ぐといわれている「量子コンピュータ」。その実現に向けて、基礎理論の開拓と実験・実証により、世界をリードする日本発の量子情報処理技術の確立を目指しています。量子力学の性質を巧みに利用した、安全な通信技術、超高精度な標準時計や計測器などの開発を通じ、情報通信、半導体産業の活性化が期待されています。



最適化問題を解く量子シミュレーター。赤黄それぞれの点には2種類のボーズ・アインシュタイン凝縮体が存在し、それ自体が最適化問題の情報を含んでいます。(日経サイエンス2011年3月号より)

トップエスイープロジェクト

トップエスイーは、世界最高レベルのソフトウェア工学教育を行うプロジェクトです。最先端の技術・理論を開発現場に即した演習を通して学ぶ23の講座と、担当講師がマンツーマンで指導する修了制作からなる1年間のコースで、IT技術者を育成します。33社の協賛企業を中心に、120名以上の修了生を輩出しています。



トップエスイー授業風景

社会共有知研究

異分野の知の共有と連携を促進し、学術情報循環のエコシステム*を確立するための情報共有基盤Researchmapの開発・提供を行っています。また、教育機関が情報基盤をワンストップで構築するためのシステムNetCommonsの開発・提供を行っており、多くの教育機関等が学校ウェブサイト・学校グループウェア・教員研修システム等に活用しています。

*情報を再利用することで、新たに作る手間と入力ミスなどのリスクを回避する考え方



次世代の情報共有基盤システム NetCommons

学術情報ネットワーク

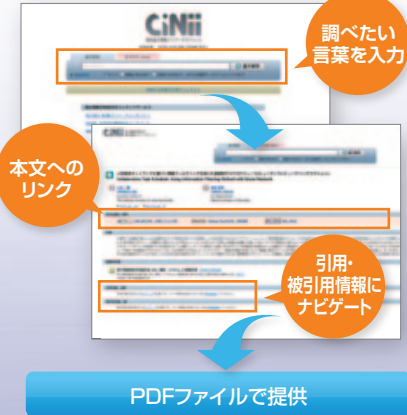
学術情報ネットワーク(SINET)は、全国の大学等の学術研究・教育活動を支える情報ライフラインであり、利用者は200万人以上、接続機関は700を超えています。平成23年4月からは、従来のSINET3を発展させた「SINET4」の運用を開始しました。また、海外学術ネットワークとの相互接続により、国際連携も推進しています。



SINET4 ネットワーク図

学術コンテンツ

学術論文や図書・雑誌等の情報を収集・蓄積し、各種データベースとして公開しています。さらに、これらを網羅的に検索できるポータルサイトを提供しており、大学の教育研究のみならず一般市民にも広く活用されています。また、学術情報の円滑な流通を促進するため、学術機関リポジトリ構築連携支援事業等により、オープンアクセスを推進しています。



論文検索: CiNii(サイニィ) <http://ci.nii.ac.jp>
図書検索: WebcatPlus(ウェブキャットプラス) <http://webcatplus.nii.ac.jp>

連想の情報学

情報に内在する関連性を定量的に評価する連想計算機構を構築して、大量の電子情報の中から利用者の発想を刺激する情報を高速に収集して分類整理する情報サービスを提供しています。想-IMAGINE Book Search、Webcat Plus、文化遺産オンライン、新書マップ、JIMBOUなど文化の記憶を連想で紡ぐサービスを展開しています。





The Institute of Statistical Mathematics

統計数理研究所

「データに基づく合理的推論の仕組み」の研究を推進します

予測や発見など「データから情報を取り出す」ことは人間が行っている知的活動の根幹に関わる営みです。情報環境の発達にともなって、現代社会には膨大なデータが利用可能な形で蓄積されつつあります。統計数理研究所は、生命、環境、社会、経済などを対象とした広義の科学技術の分野において「データに基づく合理的推論の仕組み」の研究を推進し、データから新たな価値を創出して、複雑性・不確実性が增大しつつある現代社会におけるデータの有効活用の要請に応えようとしています。

予測と知識発見、不確実性のモデリングとリスクの解析、データの設計と調査、計算推論、基礎数理、統計資源などに関する方法および理論を、わが国の科学技術の現場の問題を解決する中から研究開発しています。分野横断的な広がりをもって、所外の研究者および実務家との共同研究が多数進行中です。

基幹的研究組織の構成

モデリング研究系

多数の要因が複雑に関連した、時間的・空間的に変動する現象や知的な情報処理のモデル化、およびモデルに基づく統計的推論の方法に関する研究を行っています。

構成グループ

- 時空間モデリンググループ
- 知的情報モデリンググループ
- グラフ構造モデリンググループ

データ科学研究系

不確実性と情報の不完全性に対処するためのデータ設計と調査、分析の方法および計算機の高度利用に基づくデータ解析法に関する研究を行っています。

構成グループ

- 調査解析グループ
- 多次元データ解析グループ
- 計算機統計グループ

数理・推論研究系

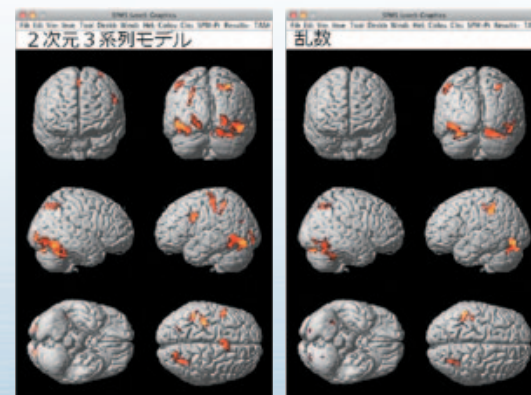
統計基礎理論、統計的学習理論の構築、および統計的推論に必要な最適化、計算アルゴリズムの理論と基礎数理に関する研究を行っています。

構成グループ

- 統計基礎数理グループ
- 学習推論グループ
- 計算数理グループ

共同利用とNOE活動

統計に関する数理およびその応用の研究の中核の役割を担う大学共同利用機関として、国内外の研究者を募って、予測・発見技法、データ同化技法、調査技術などに基づく公募型の共同研究を推進しています。2004年からは異なる基幹的研究組織研究員を横断的に配置した戦略的研究組織を設置し、諸研究組織を統計数理の立場で連携させるNOE (Network Of Excellence)活動も開始しました。NOEの中で行う共同研究の中で、実践指向の若手研究者の育成を行っています。統計数理研究、研究者育成の国内唯一の本格的拠点として、今後もNOE型共同研究を加速し、その社会責任を果たします。



アルゴリズムの違いによる脳活動の違い(自治医科大学との共同研究)

先端学術や現実社会と統計数理とのインターフェースを形成する戦略的研究組織

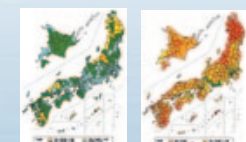
予測発見戦略研究センター

複雑なシステムが生み出す大量のデータから有用な情報を抽出し利用する「予測と発見」のためのモデリングや推論アルゴリズムなどの研究および統計ソフトウェアの開発を、ゲノム科学や地球・宇宙科学等の実質科学の具体的課題の解決に即して行っています。

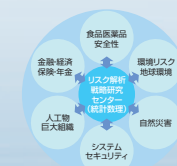
リスク解析戦略研究センター

社会・経済のグローバル化にともなって増大した不確実性とリスクの問題に科学的に対応するための、リスク解析に関するプロジェクト研究を推進するとともに、リスク解析に関する研究ネットワークを構築して、社会の安心と安全に貢献することを目指します。

時空間クラスタリングによる自殺死亡の増加実態(10歳以上の男)



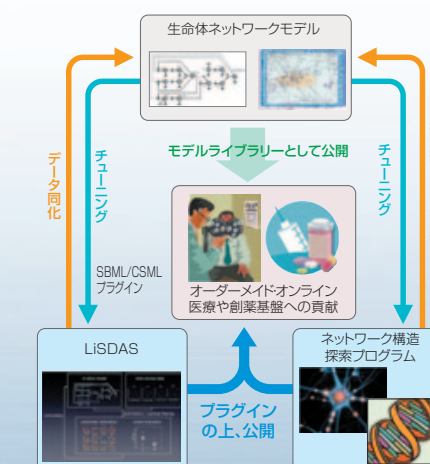
1993-1997年 年齢調整死亡率 (DAR:人口10万人当たり) (経典的ベイズ推定値)
1998-2002年 年齢調整死亡率 (DAR:人口10万人当たり) (経典的ベイズ推定値)



リスク研究ネットワーク(40組織)形成

データ同化研究開発センター

データ同化研究開発センターでは、地球規模の複雑なシステムが示す現象の高精度予測のために、超高次元の時空間観測・計測データと最先端の大規模なシミュレーションモデルを統合する計算手法と高次元データ可視化法、および乱数発生法の研究を行っています。



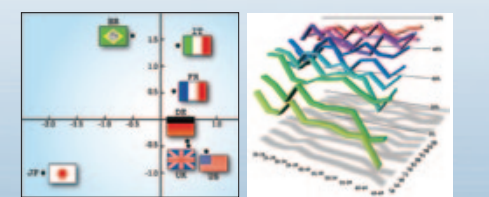
データ同化技術を通じたオーダーメイド創薬

新機軸創発センター

社会および学術研究の新しい潮流を見据え、萌芽的なものも含めて自由な発想に基づく研究プロジェクトを推進することにより、統計数理における新機軸の確立を目指します。

調査科学研究センター

統計数理研究所の半世紀以上にわたる実践的社会調査研究の成果を基盤として、そのさらなる発展と、調査科学研究の全国ネットワーク構築を通じ、国内外の関連大学や官民学の関連諸機関との連携および人材育成等の社会的貢献を促進することを目指しています。



7カ国の国際比較調査結果の数量化
女性の「女に生まれ変わりたい」の3Dグラフ(日本人の国民性調査)



National Institute of Genetics

国立遺伝学研究所

遺伝子・ゲノムから生命システム解明を目指します

国立遺伝学研究所は、DNA二重らせん発見の4年前にあたる1949年に創設されました。以来60年の歴史は生命科学の爆発的な進展と重なり、数々の優れた研究業績を輩出してきました。生命は複雑なシステムですが、それを解き明かす上で遺伝学の手法や考え方は非常に強力です。これは、生命がゲノムに書き込まれた遺伝情報と内外環境との相互作用でできあがっているからです。このため、遺伝学は生命科学の根幹といえます。国立遺伝学研究所は、遺伝学の中核拠点として生命システムの解明を目指した先端研究を進めています。また、生命科学の基盤となる研究事業を展開しています。これらの研究・事業活動により、共同利用・共同研究を推進しています。さらに、新分野創造センターを設置し、生命科学の新分野開拓と若手研究者の育成に努めています。大学院教育においても、総合研究大学院大学生命科学研究科・遺伝学専攻を担当し、優秀な研究者を世に送り出しています。

生命科学の先端研究を進めています

生命システムの個別メカニズムの解明を目指した研究を進めています。「染色体や細胞の構造と機能」、「遺伝子発現を調節するエピジェネティクス」、「生物の形作りにかかわる発生・分化の仕組み」、「遺伝情報を次世代につなぐ生殖細胞」、「脳・神経や行動などの高次

機能」、「生物多様性と進化のメカニズム」などが主な研究テーマです。さらに、ゲノム配列情報や遺伝子発現情報に代表される大量の実験データとコンピュータ科学を駆使して、生命システムの全体像の解明を目指した研究を進めています。

<最近の研究成果から>

植物の爆発的ゲノム進化の再現

シロイヌナズナのDNAメチル化低下突然変異体から植物の爆発的ゲノム進化を再現しました。



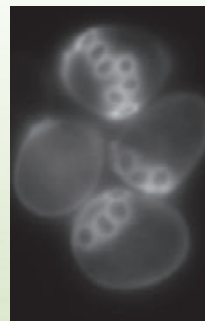
正常



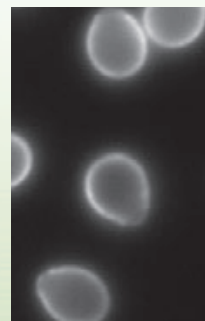
発生異常

細胞の若返りのしくみを発見

ゲノムの特定領域の安定性が老化をリセットし細胞を若返らせていることを酵母で発見しました。



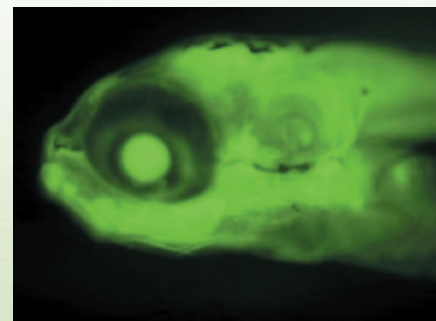
老化した細胞



若返りを起こした細胞

遺伝子発現誘導システムを構築

ゼブラフィッシュでトランスポゾンを用いてさまざまな細胞を可視化あるいは機能阻害し、遺伝子と細胞のはたらきを研究しています。



トランスポゾン挿入ゼブラフィッシュ

生命科学を先導する研究事業を展開しています

日本DNAデータバンク (DDBJ)、生物遺伝資源 (バイオリソース)、DNAシーケンシングセンターの3つの研究事業を国際的な中核拠点として運営しています。他の大学や研究機関とも連携したこれらの事業により生命科学を先導し、研究コミュニティを支援しています。



DDBJ事業

欧州のEBI/EMBL-Bank、米国のNCBI/GenBankと3局共同で、「国際塩基配列データベース (INSD)」を構築・維持・配布しています。INSDデータは自由に閲覧・ダウンロード・改変・再配布が可能な人類の共有財です。



スーパーコンピュータシステム

生物遺伝資源事業

生物系統の開発・収集・提供の拠点として生物遺伝資源事業を展開しています。文部科学省NBRPの中核拠点整備の代表機関を務め、情報センターとして大学等と連携してバイオリソースデータベースの構築と公開運用を進めています。



DNAシーケンシング事業

多細胞生物の全ゲノム解読で国内最大の実績とノウハウを持ち、これまでに29機関 (大学、研究所) との共同研究により44生物種のゲノムや遺伝子解析を行ってきました。学術分野のゲノム情報産出の中核として機能しています。



DNAシーケンサー

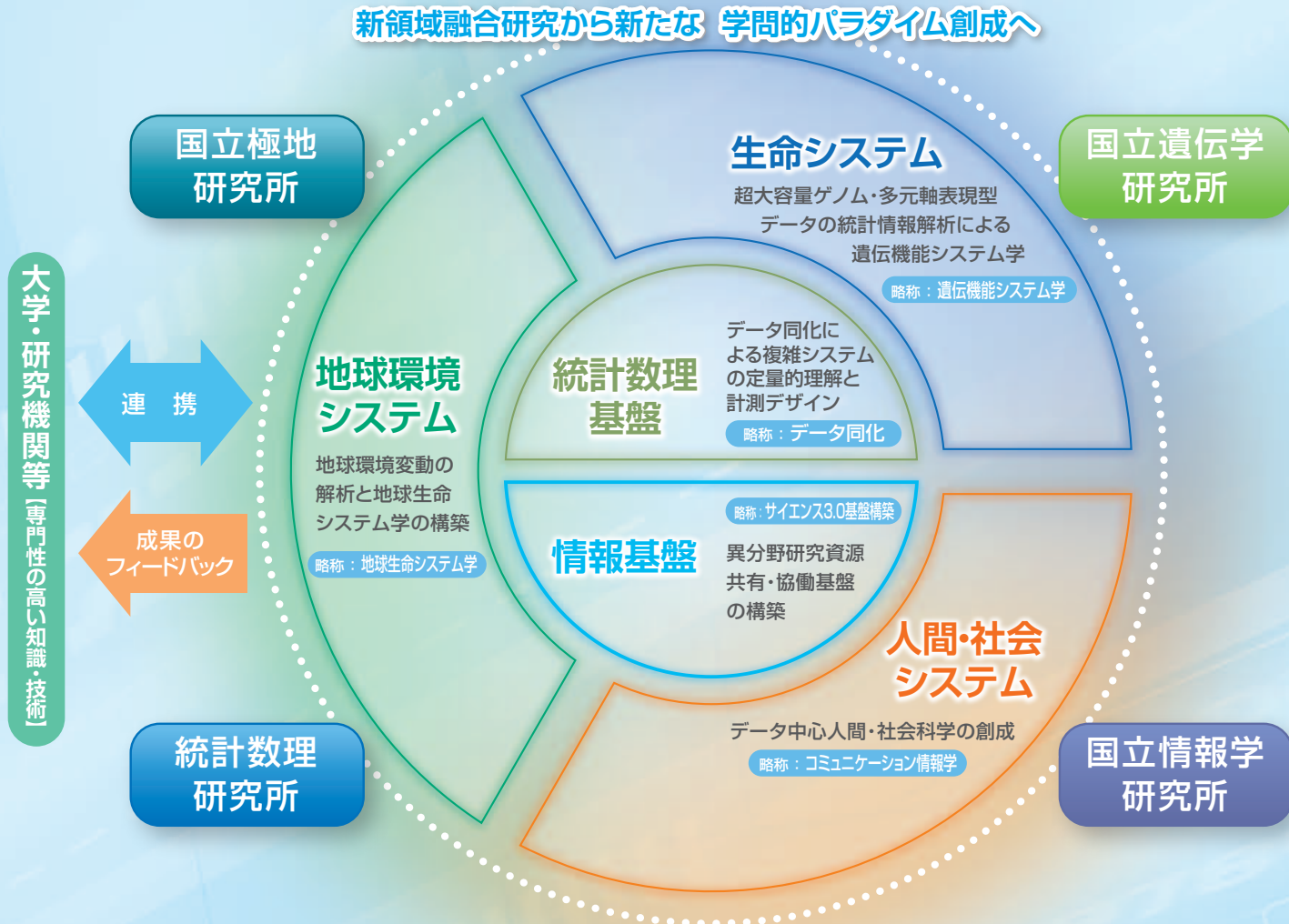
新領域融合研究センター

研究分野の枠を超え、 『融合研究』の発展を担います

新領域融合研究センターは、従来の研究分野の枠を超えた連携協力の可能性と有効性が期待される機構内の4研究所を組み合わせることで「これまでの大学共同利用機関の活動をさらに発展させるとともに、新分野の創造を目指す」という情報・システム研究機構の基本的な方針の実現のため、機構発足と同時に機構本部に設置されました。

第2期の新領域融合研究センターは、緊迫する地球環境、食料、人間、社会等の複雑システムの問題を見据え、第1期の研究領域「地球環境システム」「生命システム」に「人間・社会システム」を新たに加え、この3領域が統計数理基盤および情報基盤と一体的に連携することとし、5つの新領域融合プロジェクトを推進することとしました。

また、新領域融合研究センターでは、これらの大型プロジェクトに加えて、若手研究者の交流を深める「若手研究者クロストーク」や融合研究のアイデアの調査・探索を助成する「融合シーズ探索」なども実施し、融合研究の人材育成に向けた活動も積極的に行っています。



地球環境システム

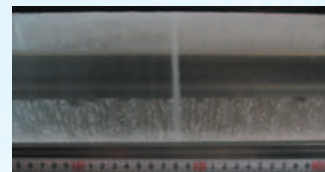
地球環境変動の解析と地球生命システム学の構築

略称：地球生命システム学

プロジェクトディレクター 国立極地研究所 本 山 秀 明 教授

サブプロジェクトディレクター 国立極地研究所 伊 村 智 教授

地球環境は地球上の気水圏、地圏、生物圏、そして、人間圏の相互のバランスの上で形成されてきました。地球環境変動と微生物の進化・多様化の相互作用を理解し、環境変動下での生命の適応戦略のメカニズムを明らかにし、地球生命システム学の構築を目指します。新しい分野の創成としての極限環境に順応した多様な微生物試料の解析、生命システムのメカニズムの理解、貴重な遺伝子資源開発、数十万年前の過去の生物のタイムカプセルの復元と生命の進化、生物多様性を解明します。



南極ドームふじ基地の水床コアです。深さ1851mのところに約14万年前に噴出した火山から降下して降り積もった火山灰が層状に見えています。



水深3mほどの南極湖沼底に林立するコケボウです。水生のコケと、藻類、バクテリアの集合体です。高さは80cmほどになり、1000年あまりかけて成長してきたものと考えられています。

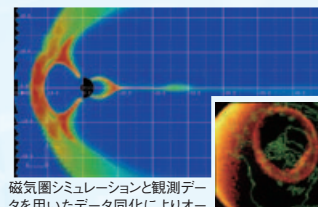
統計数理基盤

データ同化による複雑システムの定量的理解と計測デザイン

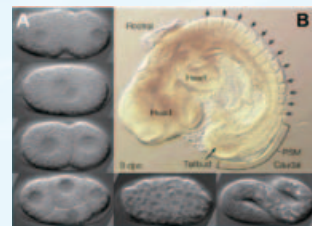
略称：データ同化

プロジェクトディレクター 統計数理研究所 中 野 純 司 教授

コンピュータの計算能力の向上とともに大規模かつ複雑精緻なものとなるシミュレーションモデルと、飛躍的に増大することが予想される観測・計測データの融合技術の開発は急務です。本プロジェクトでは、広範囲な分野の複雑なシステムを対象とする研究の具体的な問題解決に向けた共同研究をとおして、シミュレーションとデータ解析の作業を一体化する手法の高度化と一般化を実現します。あわせて、未適用分野の発掘を戦略的にすすめ、個別科学を横断的につなぐ新しい学問領域を創ります。



磁気圏シミュレーションと観測データを用いたデータ同化によりオーロラの発生メカニズムを探ります。



線虫の細胞分裂(A)とマウスの初期発生(B)を主な研究対象として、複雑な動物の発生現象のモデル構築にデータ同化手法を応用する可能性を探ります。

情報基盤

異分野研究資源共有・協働基盤の構築

略称：サイエンス3.0基盤構築

プロジェクトディレクター 国立情報学研究所 新 井 紀 子 教授

自然科学から人文科学にわたる異分野の「知」と「人」の共有・連携を行い、情報や研究人材の効果的な活用や研究協力・共同研究の促進を行う学術知共有・学術連携促進基盤を構築し、実用に応じます。その手段として、インターネット上でさまざまなところに散在する学術情報および研究支援サービスを結合して利用可能とするプラットフォームを構築します。このように収集された学術データを研究対象として新しい検索技術・機械学習・データマイニング・ユーザインタフェース技術・可視化技術等の研究開発を通じて、研究者あるいは研究分野・研究プロジェクトごとにパーソナライズされた学術情報・学術サービスの提供を目指します。



生命システム

超大容量ゲノム・多元軸表現型データの統計情報解析による遺伝機能システム学

略称：遺伝機能システム学

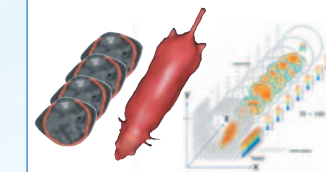
プロジェクトディレクター 国立遺伝学研究所 倉 田 の り 教授

遺伝機能システム学は、多角的遺伝情報を遺伝学、情報学、統計学により統合的に解析し、複雑な生命・遺伝現象の原理やメカニズムをシステムとして理解することを目的としています。

本プロジェクトでは、国立遺伝学研究所が保有する遺伝資源を軸に、大量ゲノム配列多型情報、遺伝子発現多型情報、表現型多型や経時変化等の多次元・多様な遺伝因子の網羅的データを得ます。国立情報学研究所の情報処理技術、統計数理研究所の統計モデリング技術を駆使して、ゲノム機能と遺伝的ネットワークの抽出を行います。

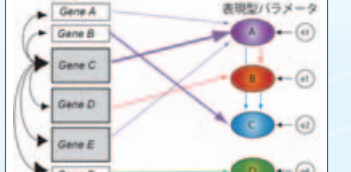
表現型の自動計測システムの開発

3D画像データの情報学的解析、時系列データの統計解析など



遺伝的要素の解析からシステム解明へ

QTL、e-QTL、Association解析、Graphical Modeling など



人間・社会システム

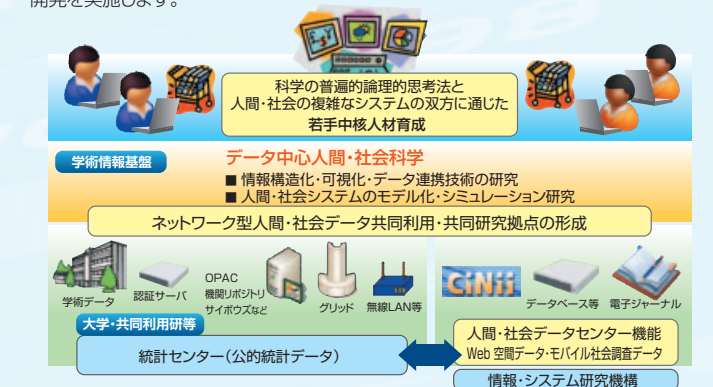
データ中心人間・社会科学の創成

略称：コミュニケーション情報学

プロジェクトディレクター 国立情報学研究所 曾 根 原 登 教授

サブプロジェクトディレクター 統計数理研究所 椿 広 計 教授

わが国が緊迫する「地球環境保護やエネルギー・食料問題」、「高齢化社会の医療・健康問題」、「安全・安心・信頼社会の実現」等の社会問題を解決する知の循環環境の整備を目的とする研究です。具体的には、相互情報コミュニケーション・メカニズムの解明による新たなコミュニケーション情報学を創成します。このため、人間・社会を横断的に俯瞰可能とする多様で大規模な人間・社会データの時空間統合、人間・社会のコミュニケーション・メカニズムの解明、社会的・文化的価値と経済的価値の関係性に着目した人間・社会全体のダイナミクスの解明、および人間・社会のさまざまな問題を解決するリスクと証拠に基づいた人間・社会システム設計手法の確立に関する研究開発を実施します。



ライフサイエンス統合データベースセンター

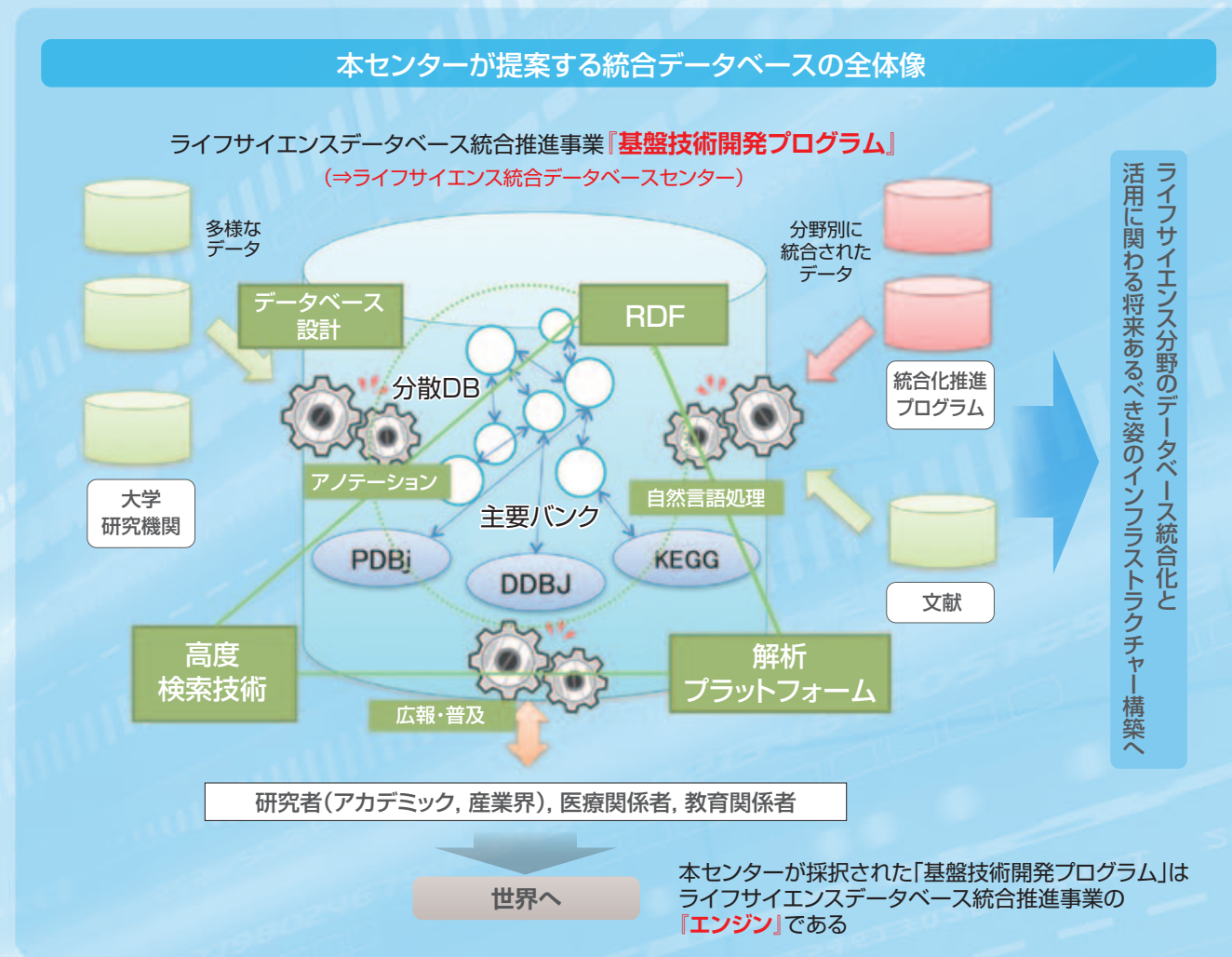
ライフサイエンス発展のための知的情報基盤を構築します

ライフサイエンス統合データベースセンターは、わが国のライフサイエンス分野の発展のため、ライフサイエンスにかかわる情報やデータベースへのアクセスとそれらの利便性の向上をはかることを目的に、データベース統合化を推進する中核組織として設立されました。

本センターが中核となって実施してきた文部科学省委託研究開発事業「統合データベースプロジェクト」(平成18～22年度)では、それまでライフサイエンス分野のデータベースが抱えてきたさまざまな問題を解消するための多様なサービスを提供してきましたが、さらに高度な統合を目指すためには、

サービスの連携や統合のための技術開発をより推進する必要が出てきました。

平成23年度からは、サービス運用は「統合データベースプロジェクト」の成果を引き継いだ「ライフサイエンスデータベース統合推進事業」を実施する科学技術振興機構に新設されたバイオサイエンスデータベースセンターへ移行されます。一方、本センターは「ライフサイエンスデータベース統合推進事業」の基盤技術開発プログラムを通じて高度な統合や利用技術の開発を中心とした貢献を継続し、将来あるべき統合データベースのインフラストラクチャー構築を目指します。



研究データのライフサイクル変化と統合データベース

ライフサイエンス分野は、解析手法や計測装置の革新的な進歩により、多様なデータが大量に得られる時代になり、先ずデータありきの状態から、バイオ産業におけるイノベーション、ライフサイエンス分野の新たな知識発見、ひいてはデータ駆動型の科学を実現するという、新たな研究スタイルを確立しなければならないフェーズにあります。

こうした状況の中で、データベース統合化の最終的な目標は、知識発見につながる整理された、意味のある情報を提供することであり、そのためには、個々の研究者や技術者が個人では扱えない規模の多量かつ大量のデータベースの中から、各個人が必要とするデータ、情報をストレスなく入手できる情報の共有環境、および必要となるコンテンツを整備、提供することが重要となります。また、更なる知識発見を促進するために、得られた知見が速やかに統合データベースに格納され、効率よく共有できる環境を構築する必要があります。

世界的には、すでに20年以上の歴史のある米国のNCBIや欧州のEBIといったデータ集約型のデータセンターがありますが、すでに数多くのデータベースが構築されている国内の現状を考えると、改めてデータを集約するよりは、データを統合的に利用できる環境を整えるほうが効率的にデータベース統合を実現できると考え、本センターでは、大規模集中型の統合ではなく、分散したデータベースをあるがままに利用する「フェデレーション(連携)型」のデータベース統合を提案しています。

データ駆動型ライフサイエンス研究の将来像

さまざまな方策により、知識発見につながる整理された、意味のある情報提供が行える統合利用環境が構築できれば、日本固有のデータや日本が生み出したデータを海外のサイトに行かなければ整理された形で利用できないといった状況を大きく変革でき、それは同時に海外への情報発信力を大きく強化する効果ももたらすものと考えています。また、これらのインターネット活用技術は、ウェブサービスやセマンティックウェブのライフサイエンス分野への適用に関して、世界の第一線で活躍する研究者、開発者を毎年一堂に集めることで構築してきた人的ネットワークに立脚して開発するものであり、世界をリードするポジションにつけるものと考えられます。

分散型の統合データベース構築と利用技術の開発

平成22年度までの「統合データベースプロジェクト」では、“所在情報や利用法が不明”、“信頼性の高い注釈が無い”、“大型プロジェクトの成果公開が不十分”、“プロジェクト終了後の維持が困難”等のライフサイエンス分野のデータベースが抱える問題を解決するために、所在情報のデータベースカタログ、多数のデータベースを対象とする横断検索、保全と共有のためのデータベースアーカイブ等の開発に加え、サービスの基盤技術開発やコンテンツ作成においても多くの成果を蓄積しましたが、その一方で、増え続けるデータベースやサービスの連携不足など解消していない問題も残っています。

そこで本センターでは Resource Description Framework (RDF) 技術を用いた分散型の統合データベース構築と利用技術の開発を次期統合化の中心課題としました。それぞれ仕様の異なる国内外の主要データベース、有用データベースをRDFにより統一し、それにあわせて解析プラットフォームや検索技術の開発を行うことにより、異種のデータベースを組み合わせることで解析することが格段に容易になり、データの注釈付けの助けにもなります。これにより、国内の研究者の利便性を向上させるだけでなく、国際的にも先進的な統合データベースシステムの実現が期待できます。

RDF化による統合を進める一方で、次世代シーケンサーのように、従来をはるかに超えるペースで蓄積される大規模データの利用技術開発として、データの格納方法、解析手法、研究者コミュニティでの共有方法についても取り組んでいきます。

既存のサービスの高度化と情報発信

「統合データベースプロジェクト」で推進してきた特長あるコンテンツ作成、日本語コンテンツ作成についても継続し、引き続き充実を図っていきます。また、これまで行ってきた普及啓発・広報活動については、事業全体の活動拠点となるバイオサイエンスデータベースセンターに対して積極的に提案・協力を行うとともに、独自の活動も行っています。利用者の皆さまからのお声に積極的に対応していきたいと考えておりますので、引き続きご要望等お寄せください。(support@dbcls.rois.ac.jp)

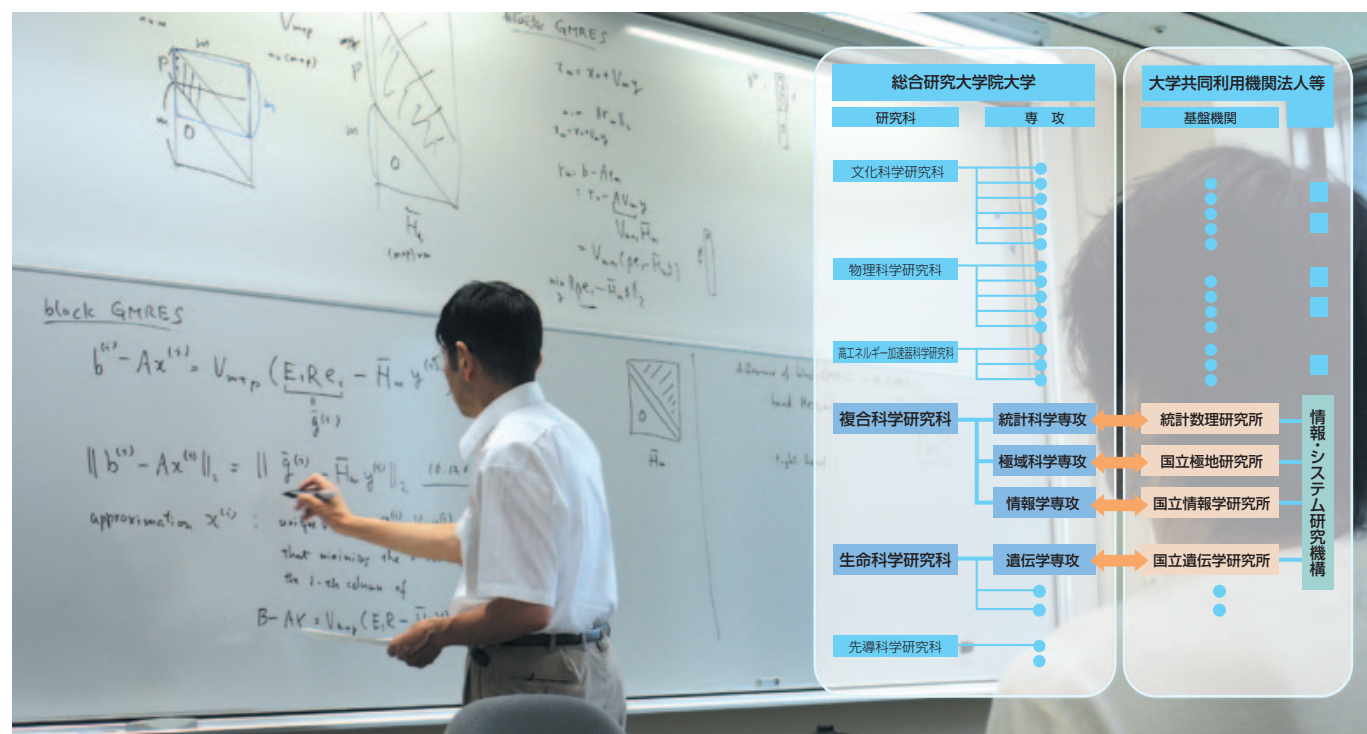
総合研究大学院大学との連携

本機構は、総合研究大学院大学の教育活動の基盤を構成しています

総研大は、大学共同利用機関が有する優れた研究環境と人材を活用してトップクラスの研究者を育成する、という世界でも類例のないコンセプトのもとで昭和63年に設立された、大学院のみを置く大学です。大型設備や観測施設、学術的に価値の高い資料やデータ、そして第一線で活躍する国内外からの研究者集団との交流という理想的な研究環境を備えた各研究所の教育・研究の場(基盤

機関)において大学院教育を行っています。

本機構の4研究所はすべて基盤機関として参画し、2研究科4専攻の教育研究を受け持っています。研究所の教員の多くが総研大教育に携わり、学生はマンツーマンの教育、豊富な研究費による手厚い支援を受けています。ほとんどの修了生は研究職に就いており、総研大設立の目的を果たす面で本機構は大きく貢献しています。



■ 在籍学生数(平成22年5月1日現在)

研究科	専攻(基盤機関)	入学定員		1年次		2年次		3年次		4年次		5年次		計	
		博士 後期課程	5年一貫 博士課程	留学生		留学生		留学生		留学生		留学生		留学生	
複合科学	統計科学(統数研)	3	2	3	1	1	0	5	0	8	0	13	0	30	1
	極域科学(極地研)	1	2	1	0	3	0	2	0	3	0	7	1	16	1
	情報学(情報研)	6	4	7	4	8	3	14	5	10	4	33	7	72	23
生命科学	遺伝学(遺伝研)	6	3	4	0	8	2	10	3	9	1	13	0	44	6
計		16	11	15	5	20	5	31	8	30	5	66	8	162	31

■ 学位授与状況(平成22年度)

研究科	専攻	基盤機関	学位取得人数
複合科学研究科	統計科学	統計数理研究所	7
	極域科学	国立極地研究所	2
	情報学	国立情報学研究所	8
生命科学科学研究科	遺伝学	国立遺伝学研究所	8
計			25

複合科学研究科

● 統計科学専攻

氾濫する情報と不確実性のもと、データによる合理的な推論、新知見の発見、有効な予測のための統計モデルや統計的方法を研究するのが統計科学です。複雑に絡み合うさまざまな重要課題の解決に貢献する、独創性豊かな研究能力を備えた人材の育成を目的としています。これまで幅広い学問分野から学生を受入れて養成し、大学教員や研究所員を輩出して、大学などでの統計科学の研究者や教育者の必要に応じてきました。



ポスター発表会

● 極域科学専攻

極域の自然は、宙空間、気水圏、地圏および生物圏が相互につながり、全体が大きな自然系を構成しています。極域科学は、この自然系に係る幅広い研究分野の基礎に立ち、物理的、化学的、生物的諸過程とその相互作用を地球システムの一環として究明することを目的としています。

極域科学専攻においては、南北両極域の自然現象を中心に、全球的規模の環境をも視野に入れた教育研究を行い、高度の研究能力を備え、フィールドサイエンティストとしての力量を持つ優れた研究者を養成します。



オーロラ観測

● 情報学専攻

情報学は、情報に関する諸問題を広範かつ総合的に取扱う新しい学問分野であり、伝統的な情報科学・情報工学を中核としつつ、人間や社会を対象とする人文情報学・社会情報学をカバーする複合科学です。

情報学専攻においては、従来の計算機科学、情報工学から人文社会科学や生命科学を広くカバーしており、基礎・応用・実用の各段階の教育研究を通じて、研究者を養成するとともに、高度な専門職業人養成を行い、情報学の分野で活躍するリーダーを育成することを目的としています。



ディスカッション風景

生命科学科学研究科

● 遺伝学専攻

遺伝学専攻では、生命現象を遺伝子との関連の下に解明することを目的として、分子・細胞・個体・集団遺伝学の各基礎的分野およびこれらを基盤とする応用的分野において、遺伝研に整備されている数多くの実験生物系統やDNAデータベースに基づいたバイオインフォマティクス、その他最先端の共通機器等を活用した教育研究を行っています。

大学院教育は、「一人一人の大学院生を全教員で指導する」という理念の下、指導教員一人だけではなく複数の教員の指導が受けられるような制度を実施しています。



質の高い研究

広報活動・情報発信

最先端の研究内容を、研究者から一般の方々まで幅広く伝え、本機構の活動へのご理解、ご支援をいただくため、さまざまな広報活動・情報発信に取り組んでいます。ここではその一部をご紹介します。

シンポジウム

機構の研究活動に共通の課題の中からテーマを設定して、年に1度、「情報とシステム20××」と題するシンポジウムを開催しています。

昨年度は、研究アプローチとして共通のテーマである「モデリング学」にスポットを当て、ヒューマン工学、e-サイエンス、地球環境など6つの研究領域について、機構内外の研究者による講演を行い、続くパネルトークでは、モデリング技術を備えた人材を育成するうえで大学院教育に大切なことは何かを論じました。



前年度の会場の様子

「情報とシステム」開催状況

開催年度	テーマ	開催日	会場	参加者数
2008	社会のイノベーションを誘発する情報システム	H20.11.5	一橋記念講堂	250人
2009	ー科学と文化の基盤：大学とともに育むデータベースー	H21.11.30	コクヨホール	160人
2010	大量データ社会のリテラシー：モデリング技術	H22.10.25	一橋記念講堂	230人

一般公開(オープンハウス)

各研究所とも、日頃の研究活動や成果を広く地域の皆さまや研究者、研究を志す方たちに見ていただくため、研究の現場を公開し、講演や展示、研究者による説明を交えて所内を開放する日を設けています。

遺伝研では、全国から収集された260余りにわたる貴重な品種のサクラが春に一齐に咲きますが、それに合わせて4月上旬に一般公開を行い、1万人を超える来場者でにぎわいます。また、極地研では、マイナス50度の低温室などを体験する“探検ツアー”や、昭和基地とのライブトークが好評を博しています。



遺伝研の一般公開

国立極地研究所 南極・北極科学館

南極・北極科学館は、日本の極域科学研究の最前線、南極観測、北極観測の現状と成果およびその歴史等を広く情報発信する、立川キャンパスに新設した常設展示施設です。

オーロラシアターでは、南極や北極のオーロラを直径4mの全天ドームスクリーンに臨場感のあるムービーとして上映しているほか、南極観測の映像、南極で採取した隕石や生物標本の剥製、観測隊が実際に使った雪上車や昭和基地の個室模型、触れる南極の氷などを展示しています。



南極・北極科学館の様子

利用案内

開館日時	毎週火～土曜日 10:00～17:00(最終入館16:30)
休館日	日曜日、祝日、月曜日、年末年始(12/28～1/4)
入場料	無料

ホームページ

機構の活動状況やイベント情報、法人情報に加え、研究所の最新情報に関するポータルサイトとして、タイムリーな情報発信を行っています。



▶ Twitterも発信しています。

研究所・センター	公式アカウント
国立極地研究所	@kyokuchiken
国立情報学研究所	@jouhouken
ライフサイエンス統合データベースセンター	@dbcls

出版

研究の結果を一般の方にも分かりやすく紹介、解説したシリーズ本を市販の書籍として出版しています。「情報研シリーズ」に続いて、新たに「極地研ライブラリー」の刊行が始まりました。



国立遺伝学研究所 展示スペース

本館1階にあるシックな色調の一室に、60余年にわたる遺伝研の歴史や、ダーウィン「種の起源」の初版本、ノーベル賞受賞者をはじめとする著名な研究者が遺伝研来訪の記念に描いた絵皿のコレクションなどを展示しています。



展示スペースの様子

国立情報学研究所 市民講座

情報研の研究者が「情報学」の先端を一般向けに解説します。今年度は、「未来を支える情報学」というテーマのもと、量子コンピュータ、ソフトウェアの品質保証など8つのトピックを取り上げます。



開催時間	18:30～19:45(第1回のみ19:00～20:30)
受講料	無料(事前にお申込みください)
詳細	http://www.nii.ac.jp/shimin

●平成23年度スケジュール

回	開催日	講演テーマ	講師
1	H23.6.2	医療を支えるセンサーネットワーク	須藤 修
2	H23.8.1	新しい情報社会の扉を開く量子技術	山本 喜久
3	H23.9.1	コミュニケーションを科学する	坊農 真弓
4	H23.10.5	インターネット時代の文字コード	宮沢 彰
5	H23.11.2	データを圧縮する	定兼 邦彦
6	H23.11.30	グリーン化へのITの貢献	浅野 正一郎
7	H24.1.18	コンピュータで言葉を理解する	宮尾 祐介
8	H24.2.15	ソフトウェアの品質保証	中島 震

統計数理研究所 公開講座

研究者・学生・一般社会人を対象として、統計研内外の講師による公開講座を行います。統計科学の最先端理論・手法から基礎的なもので、多様なコースを用意しています。



日程	1日～4日程度
受講料	コースによって異なります
詳細	http://www.ism.ac.jp/lectures/kouza.html

●平成23年度前期スケジュール

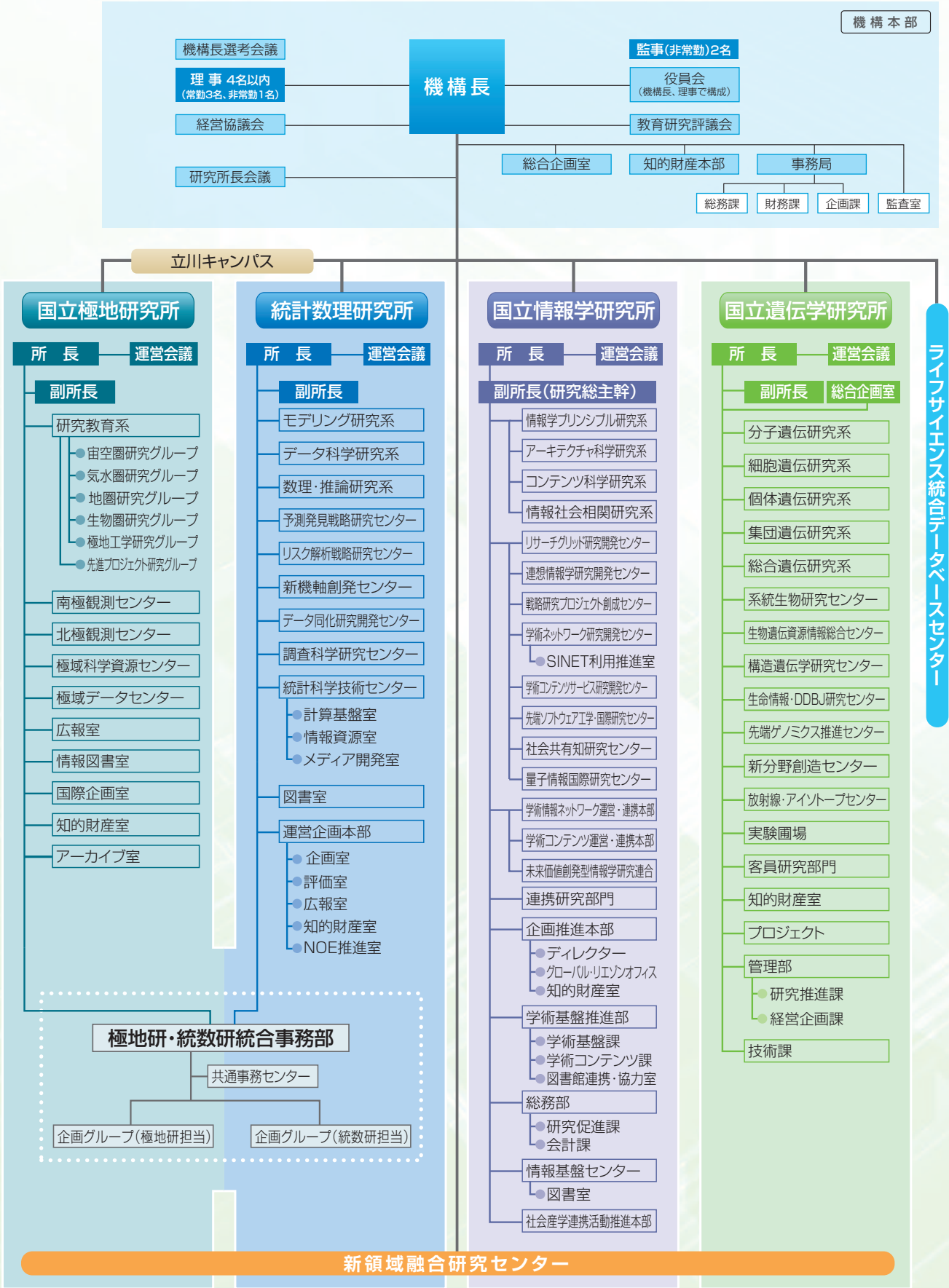
開催日	講座名
H23.5.16～19	サンプリング入門と調査データの分析法
H23.6.9～10	赤池情報量規準と統計モデリング
H23.8.29～9.1	多変量解析法
H23.9.21～22	モデルフリー制御器設計の新展開 ーFRIT(Fictitious Reference Iterative Tuning)法の基礎理論とその応用ー
H23.10.18～21	統計学概論
H23.11.10～11	マルチンゲール理論による統計解析の基礎

国立極地研究所 公開講座

極地研の第一線の研究者が極域科学や南極・北極観測の最前線を分かりやすく解説する公開講座を、今年度から開始します。本講座は、広く地域の方々のニーズを取り入れるため、立川市及びたちかわ市民交流大学市民推進委員会との協働企画講座として実施します。

日程	10月～12月頃 3回(1回あたり2時間)
受講料	無料

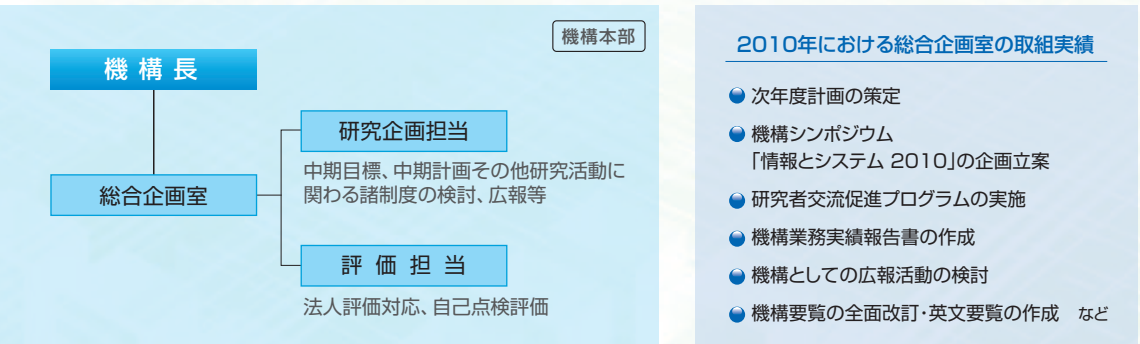
詳細は決定次第、HP等でお知らせします。



総合企画室

総合企画室は、機構の設立と同時に中期計画、年度計画の策定、実施、評価、広報など機構の横断的な取組に対応することを目的に機構本部に設置された組織です。各研究所の副所長等マネジメントを担う教員と機構本部及び各研究所の幹部事務職員により構成され、教員・

事務職員が一体となった効率的な組織運営を行っています。各研究所内でも、この総合企画室に対応する組織を所内に設置し、機構本部と研究所が一体となって相互連携のもと機構運営に取り組んでいます。



知的財産本部

知的財産本部は機構の産学官連携や知的財産に関する事業に対応する組織として法人発足と同時に機構本部に設置されました。その後、平成20年度に各研究所に知的財産室を設置し、相互に連携をはかりながら、即時性を求められる知的活動に対して機動的に対応する現在の体制が整備されました。知的財産室では、産学官連携、知的財産管理、著作権整理など研究所から生み出された研究成果をいかに生

かすか、その方策を考え、実行することをミッションとしています。本機構ではソフトウェア、コンテンツ等の著作物が多いことから、これらを社会に提供する際に生じる権利帰属をはじめとする課題を解決するため、実際のプロジェクト支援を通じて得られる事例のモデル化に取り組んでいます。また、4つの大学共同利用機関法人や総研大と相互に情報交換を行い、連携をはかっています。



役 員	
平成23年4月1日現在	
北 川 源 四 郎	機構長
坂 内 正 夫	理事、国立情報学研究所長
藤 井 理 行	理事、国立極地研究所長
小 原 雄 治	理事、国立遺伝学研究所長
郷 通 子	理事(非常勤)
安 岡 善 文	監事(非常勤)
寺 尾 仁 之	監事(非常勤)

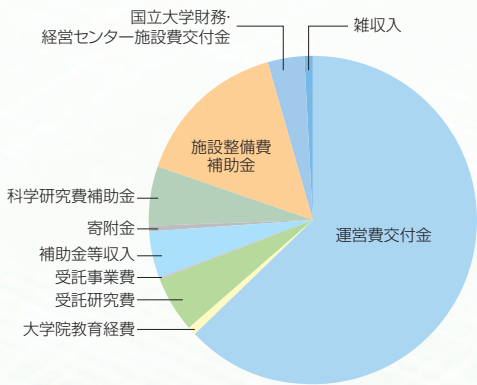
経営協議会委員	
平成23年4月1日現在	
青 木 利 晴	株式会社NTTデータ シニアアドバイザー
榊 佳 之	豊橋技術科学大学 学長
篠 崎 一 雄	理化学研究所 植物科学研究センター長
高 畑 尚 之	総合研究大学院大学 学長
辻 篤 子	株式会社朝日新聞社 論説委員
所 眞 理 雄	ソニーコンピュータサイエンス研究所 代表取締役社長
中 島 秀 之	公立はこだて未来大学 学長
長 洲 毅 志	エーザイ株式会社 理事・CSO付担当部長
丹 羽 邦 彦	科学技術振興機構研究開発戦略センター 上席フェロー
前 晋 爾	北海道大学 名誉教授
森 武 昭	神奈川工科大学 理事・副学長
北 川 源 四 郎	情報・システム研究機構長
藤 井 理 行	情報・システム研究機構 理事
坂 内 正 夫	情報・システム研究機構 理事
小 原 雄 治	情報・システム研究機構 理事
郷 通 子	情報・システム研究機構 理事(非常勤)
樋 口 知 之	統計数理研究所長
白 石 和 行	国立極地研究所 副所長
東 倉 洋 一	国立情報学研究所 副所長
田 村 義 保	統計数理研究所 副所長
五 條 堀 孝	国立遺伝学研究所 副所長
呉 茂	情報・システム研究機構 事務局長

職 員					
平成23年5月1日現在					
機 関	所 長	研究教育職員	技術職員	事務職員	計
機構本部				18	18
国立極地研究所	(1)	52	23	24	99 (1)
国立情報学研究所	(1)	70	5	43	118 (1)
統計数理研究所	1	49	10	13	73
国立遺伝学研究所	(1)	68	15	19	102 (1)
ライフサイエンス統合データベースセンター					
合 計	1(3)	239	53	117	410 (3)

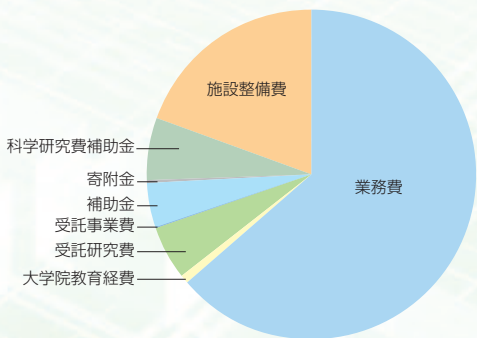
※所長の()は理事が兼務する者を示す。

教育研究評議会評議員	
平成23年4月1日現在	
合 原 一 幸	東京大学 教授
有 川 節 夫	九州大学 総長
竹 市 雅 俊	理化学研究所 発生・再生科学総合研究センター長
田 中 勝 人	一橋大学 教授
谷 口 旭	東京農業大学 教授
西 尾 章 治 郎	大阪大学 理事・副学長
深 尾 昌 一 郎	福井工業大学 教授
山 本 正 幸	東京大学 教授
北 川 源 四 郎	情報・システム研究機構長
藤 井 理 行	情報・システム研究機構 理事
坂 内 正 夫	情報・システム研究機構 理事
小 原 雄 治	情報・システム研究機構 理事
郷 通 子	情報・システム研究機構 理事(非常勤)
樋 口 知 之	統計数理研究所長
佐 藤 夏 雄	国立極地研究所 副所長
安 達 淳	国立情報学研究所 学術基盤推進部長
椿 広 計	統計数理研究所 副所長
城 石 俊 彦	国立遺伝学研究所 系統生物研究センター長

決 算 (平成22年度)	
[単位:千円]	
収 入	
運営費交付金	19,220,352
大学院教育経費	218,297
受託研究費	1,695,921
受託事業費	26,013
補助金等収入	1,485,604
寄附金	133,607
科学研究費補助金	1,775,830
施設整備費補助金	4,655,000
国立大学財務・経営センター施設費交付金	1,083,187
雑収入	241,371
合 計	30,535,182



支 出	[単位:千円]
業務費	18,885,651
大学院教育経費	218,297
受託研究費	1,608,509
受託事業費	17,006
補助金	1,288,860
寄附金	95,356
科学研究費補助金	1,775,830
施設整備費	5,738,187
合 計	29,627,696



外部資金 (平成22年度)										
[単位:千円]										
	科学研究費補助金		受託研究		民間等共同研究		受託事業		寄附金	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
国立極地研究所	56	308,953	3	13,276	0	0	2	3,567	6	6,210
国立情報学研究所	110	259,667	28	391,806	15	22,535	27	21,363	24	61,753
統計数理研究所	59	124,206	13	119,812	2	23,290	0	0	4	4,356
国立遺伝学研究所	104	1,062,231	13	508,910	5	6,100	3	1,082	16	53,977
新領域融合研究センター	14	19,762	0	0	0	0	0	0	1	1,700
ライフサイエンス統合データベースセンター	1	1,008	2	610,188	0	0	0	0	1	1,200

※科学研究費補助金にはその他の研究費補助金を含む

共同研究(公募型)機関数および共同研究員数(平成22年度)										
[単位:件・人]										
	機関数	総数	共同研究員の所属機関の内訳							
			国立大学等	大学共同利用機関	公立大学	私立大学	公的機関	民間機関	外国機関	左記以外
国立極地研究所	254	834	385	10	26	125	129	101	48	10
国立情報学研究所	209	590	309	28	22	103	34	43	47	4
統計数理研究所	240	655	311	2	30	152	112	39	9	0
国立遺伝学研究所	97	453	272	6	20	76	38	1	27	13
合 計	800	2532	1277	46	98	456	313	184	131	27

特別共同利用研究員受入状況(平成22年度)				
[単位:人]				
国立極地研究所	国立情報学研究所	統計数理研究所	国立遺伝学研究所	合 計
19	33	2	4	58

[本部・機構所属センター]



〒105-0001
東京都港区虎ノ門4-3-13
神谷町セントラルプレイス2階
TEL:03-6402-6200
FAX:03-3431-3070
<http://www.rois.ac.jp/>



- 【最寄り駅】
- 東京メトロ日比谷線神谷町駅
出口4bからホテルオークラ、テレビ東京方面へ徒歩2分
 - 東京メトロ南北線六本木1丁目駅徒歩5分

新領域融合研究センター Transdisciplinary Research Integration Center

〒105-0001
東京都港区虎ノ門4-3-13
神谷町セントラルプレイス2階
(機構本部内)
TEL:03-6402-6228
<http://www.rois.ac.jp/tric/>



ライフサイエンス 統合データベースセンター Database Center for Life Science

〒113-0032
東京都文京区弥生2-11-16
東京大学工学部12号館4・5階
TEL:03-5841-6754
<http://dbcls.rois.ac.jp/>



[機構所属研究所]

国立極地研究所 National Institute of Polar Research

〒190-8518
東京都立川市緑町10-3
TEL:042-512-0608
<http://www.nipr.ac.jp/>



統計数理研究所 The Institute of Statistical Mathematics

〒190-8562
東京都立川市緑町10-3
TEL:050-5533-8500
<http://www.ism.ac.jp/>



国立情報学研究所 National Institute of Informatics

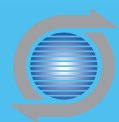
〒101-8430
東京都千代田区一ツ橋2-1-2
TEL:03-4212-2000
<http://www.nii.ac.jp/>



国立遺伝学研究所 National Institute of Genetics

〒411-8540
静岡県三島市谷田1111
TEL:055-981-6707
<http://www.nig.ac.jp/>





大学共同利用機関法人

情報・システム研究機構

Research Organization of Information and Systems

<http://www.rois.ac.jp>